

いくさ物語表現史(二)

—陸奥話記の叙法—

山下宏明

一、はじめに

軍記物語の中でも、動乱の追討記として記録性の濃い『陸奥話記』は、いくさ物語の親とも言うべき『将門記』に比べても評価が低い。なぜなのか。そのわけをいくさ物語としての表現から検討する。いくさ、戦闘は、何ごとかの事件が起こり、それがいかなる原因から生まれ、どのように展開したかを探求、調査することから物語になる。本文研究については、笠栄治らの積み重ねがあり、その決算として、大曾根章介による『日本思想大系』(尊経閣文庫本による)と、梶原正昭による『古典文庫』(国会図書館本による)がある。本稿では適宜両本を参照するが、両者は、訓読のあり方に小異があり、前者は和語化がより顕著であり、後者は訓読調を濃く残すが、特に段落の切り方に違いがある。即ち前者は、主として内容から、段落を立てているのに対して、後者は時、場所の変化を基準にしていると言えるだろう。こうしたところにすでに大曾根・梶原両氏の立場の違いが出ているのであるが、これまで軍記物語論が成立を中核と

して来たことがあり、記録としての性格を尊重し、構成法を考察するため、軍記物語論の色が強く出ていると見られる梶原の段落切りに従って論を進める。まず各段落について、叙法上の注目すべき事実を展覧する。

事件単位に段落を切るが、これを「段」と呼び、ついで、必要に応じてその下位の意味段落を「小段」と呼ぶことにする。さらに「段」の上位の構成を考えるために「章段」を立てる。この「章段」も、物語としての読みから想定されるもので、これらが後の軍記物語とどのような対応を示すかは今後の課題である。いずれにしても読みの上の段落であつて、客観的な形態としての切れ目があるわけではない。読みの課題をどこまで、成立論上の課題たらしめうるかは、今後の課題である。それはおそらく文学批判の課題でもあるのだろう。

一、乱の前哨戦、一応の落着。

(1) 安倍頼良の謀叛

物語の冒頭に奥六郡の長、安倍頼良の紹介と、その略系図を掲げ、

六郡内での暴虐を記して、永承の頃(一〇四六年から一〇五三年)陸奥守藤原登任がこれを攻めたが、かえって敗北したことを言う。

物語の全体から言えることだが、この頼良は奥州謀叛の契機をなした仇役の祖である。主役とは言えぬが、物語のきっかけをなす重要人物で、その略系を紹介するのは、いくさ物語の常套である。『将門記』が、その主役将門を紹介し、ただちに動乱のきっかけとしての行動を語り出すのと同工である。ただ、その文体は一貫して漢文による記録体で、物語としての叙法から言って、³⁾

作中人物としては筋に不在の語り手による、

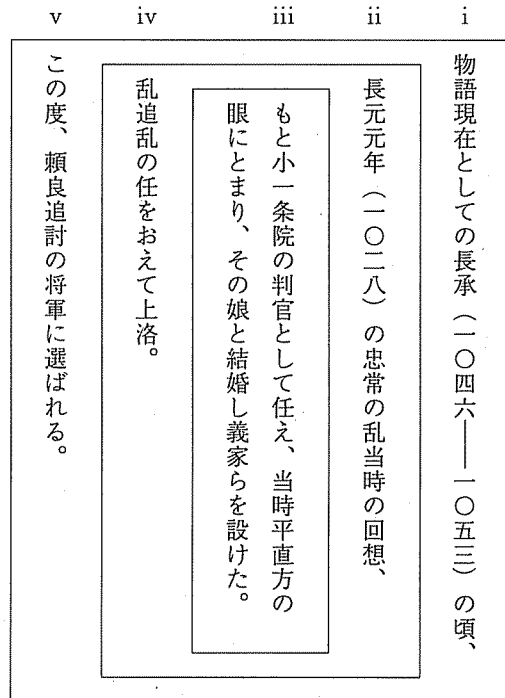
外部から視察されたできごとの語り、

すなわち、作者が外部から物語内容を語るものである。この事は巻末の奥書の叙述からも推定されるところである。

(2) 追討將軍に、源頼義が選ばれる。

「是に於て」と、次段に続ける。話をつなぐ漢文本来の接続語である。頼良追討の將軍として、衆議の末、〈独り源朝臣頼義に在り〉とあるから、まったく異論なく、頼義が選ばれたと言うのである。そしてその略系と人がらを記した後、〈長元の間〉として、長元年(一〇二八)の平忠常の反乱当時を回想し、その討伐に功績があったこと、その結果、坂東の武士に人望を得たこと、さらに時をおつて、もともと小一条院の判官代として狩獵に射芸をよくしたこと、そのために上野守平直方の眼に止まってその一女と婚し、義家・義綱らを設けたことを言い、関東にその威風に従う者が多いと言う。

(その)〈任終りて〉と言うのは長元元年の忠常の乱を指すものであるから、この段の時間順序は、



という、三重入れ子型構造をなす。それに頼義の射芸の巧みなことを語るのに、〈縦ひ猛き獸と雖も弦に應じて必ず斃る〉という誇張表現、直方の感嘆を〈僕不肖なりと雖も……一女を以て箕箒の妾と為さん〉という直接話法を以てするのは、いずれも語り手の対象への接近、この場合、頼義への共感、期待を文体として示すもの、人物描写がもつとも肉感的にあらわれ、語り手の思いを表すものである。この頼義こそ、前出の仇敵頼良に対し、物語の主役を演じる人物である。いくさ物語の表現に、語り手の、対象との距離が、表現

となつて現れる一典型をなしている。すなわち語り手の、登場人物への期待、共感が、時間としては錯時法を利用して、修辞を始め直接話法という再現された話法を見せている。上述した通りこの物語の語り手は作中人物としては筋の外にありながら、その語りの態は、事件の内部に入つて行く

分析家乃至全知の作者が物語内容を語る⁶

ものである。

(3) 頼良、頼義と名が同訓であることを憚り、大赦に便乗し、頼時と改名し帰順。

頼義の陸奥守着任当時、大赦が行われ、頼良がこれに便乗して降伏したため、動乱は一時平定した。頼義の在任中、事が無かつたと言う。外部の語り手による記録体の語りである。物語の展開に事件とのつながりをなす一コマである。その意味で物語の主題はこの後にある。

(4) 貞任の阿久利河事件を契機に、安倍一門、官に背く。

頼時の帰順により一応の落着は見た。〈而るに〉として、意外な事件が起きたと語る。將軍頼義の任務終了にあたり鎮守府から国府へ帰る途中、阿久利河での夜、密告する者があり、権守藤原説貞の子息の光貞らが、何者かに人馬を殺傷されたと言う。將軍は光貞を詮議の結果、頼時の長男貞任が光貞の妹との婚姻を望んだが、家格が違つて光貞に拒まれたための意趣ばらしだろうと言う。これを聞いた將軍頼義が怒り、貞任を処罰しようとしたため、頼時は覚

悟して一門に決起を促す。安倍一門は起つて衣川の関を目指す。この間の事情については不明で、種々説があるようだが、物語としては本題に入るきっかけを語る部分で、事実、この後、頼時の亡き後、將軍と対立することになる主の一人、貞任の登場を語るのが目的である。素材としては、本題となるべき事件の契機をなしたのが、頼義に密告した「人」であることに注目したいし、事件の当事者、光貞と、敵役頼時のことばを直接話法で語っている。原因を詮索する物語をなしている、前段同様、全知視点による語りで、当然、語り手の素材への接近が進んでいて、客観的な記録の文体を越えている。

(5) 帰順した永衡らを、人の告げ口により將軍これを斬る。

貞任の動きに呼応して將軍に背いた頼時に、〈將軍弥よ噴り〉は、前段を受けて將軍の怒りの増大することを言う。その將軍の軍勢を「雲のごとくに集まり雨のごとくに来る」という直喩など修辞の使用は、語り手の將軍への接近を見せる。意外なことに、頼時の婿、経清や永衡が將軍に従うが、ここでもまたもや「人有り」、その密告として、永衡が、前司の登任に従いながら、頼時の婿を娶つて以来、国司に二心を抱くに至つた。今回もひそかに將軍の軍の動静を探り、頼時に意を通じるのだろうと語る。この部分がやはり「人」の直接話法によつて語られる。即刻永衡らは召喚されて斬られるのだが、語り手の視点は將軍側にあるし、漢代、黄巾赤眉の故事の引用も、永衡らの二心を批判しての引用である。これらの叙法が、視点を將軍頼義の側にすえた追討記の形態を整えてゆく。

(6) 亘利経清、將軍を国府に走らせ、その間に頼時に合流。

例によつて「是に於て」の語で次の場面へ進める。あえなく永衡を討たれた亘利経清(頼時の婿)は去就に迷うが、「客」(前の「人」同様、不明の人物)に図つたところ、一旦將軍の怒りをかつたからには頼時と行動を共にするしかないとの進言に、頼時が国府にいる將軍の妻子を狙うとの流言を流し、將軍が急遽国府へとつて返す間に経時は頼時に合流する。この間、視点は安倍の側に転じ、客と経清の応答をも直接話法で語っている。安倍一門が謀叛へ走る状況を積み重ね、語り手は全知視点によつてゐる。

(7) 頼義、頼時を討つも、ひき続き貞任を討つため官符を乞う。

「今年朝廷新司を補すと雖も」、新司は合戦の噂を聞いて辞退し、命を受けない。やむなく頼義が重任する。この「今年」の一語は、時間の経過を語つていて、前後との切れ目を見せている。おりからの飢饉に、土地の兵も散つてしまうため、いたずらに時を経過する。天喜五年秋九月(前段の翌年であるが、何か月経過しているのかはわからない)、「国解を進り、頼時を誅伐するの状を言上して」として、その文面を引くが、もとより国解そのものではなく、その意を要約したもので、しかもそれによれば、この間、鳥海の柵に頼時を討っている。これまで重要な位置を占めて動乱のきつかけをなした頼時の結末を、国解の、その要約の中に記すにとどめる。物語現在からすれば、ふり返つて過去に属する頼時の死を後説法で記す。この変則な叙法は、敵役が頼時ではなく、まだ帰服していない貞任で

あることを示している。言い換えれば、これまでは物語の第一章段として前哨戦であつたことになる。この頼義の要請もかなわず、「群卿の議」が一致せず、將軍頼義はやむなく千八百余人を率いて貞任の追討に向かう。この群卿の態度を語ることが、窮する主、頼義への語り手の接近を示している。

三、黄海での官軍の苦戦

(8) 官軍、貞任らを黄海に攻めるも苦戦し、義家らの奮戦により危機を脱し退く。

貞任ら安倍軍が黄海の陣に防戦の体勢をとつたことを「拒き戦ふ」と略記した後、焦点は、これを攻める官軍の苦戦に移す。

時に風雪甚だ励しうして道路艱難たり。官軍食無くして人馬共に疲る

など、語り手は当事者の外にありながら、その語り手の姿勢は、安倍軍よりも、苦戦する官軍の側に接近している。「道路艱難たり」は官軍にとつて「艱難たり」であるから、一部官軍に同化する態を示している。「新驕の馬」すなわち新たに仕立てた、精力のみなぎる軍馬を使用する戦闘力、それに軍勢の数の点でも安倍軍が優位に立つ。この両軍の対照的な描き分けが、官軍の苦戦を物語る前半で、結果的に官軍の大敗に終わるが、その中に退路を求める「將軍の長男義家」の奮闘を「驍勇絶倫にして騎射神の如し」「矢空しく發たず、中る所必ず斃る、雷のごとくに奔り風のごとくに飛びて」と、直喩

をも駆した修辭の積み重ねは、焦点が一貫して官軍にあり、筋に不在の語り手ながら、義家の動きに共感を示している。この段の中、第二小段の主題である。ただ、その漢文の文体のゆえもあるが、語りの態は、義家に同化するまでの姿勢は見せていない。しかし見て来たような語り手の、特に義家への共感のゆえに、(夷人号を立て、八幡太郎)とする。(夷人)とは、当戦陣の辺りに住む在地人を指すが、あたかも義家の奮戦を見守る在地人を仕立てるようにして語り手の共感を、この在地人を介して(八幡太郎)の通称に込めて語っている。ところで、この八幡太郎の号は、祖神(八幡神社)の社壇に、成人式をあげた際に号したものであるから、この戦場の現地人(十訓抄)は「貞任等これを感じて」とする)が号したとするのは当たらない。つまり中央で付けた号を陸奥の現地に利用したもので、これが中央、もしくは『陸奥話記』の編集者の仮託になるものであることを物語っている。その後『古事記』のヤマトタケルの命名談など、いくさ物語の常套的方法があるのだろう。そして(漢の飛將軍の号、同年に語るべからず)は『漢書』などの「李將軍列伝」、もしくはそれを引く文献によるもので、これも軍記物語に見られる例証の方法を示すものである。以下、將軍の馬が射たおされるなどの苦戦を列記することが、一層義家と、頼義の配下、大宅光任らの活躍を顕彰することになる。全体としての黄海での將軍勢の苦戦を種々修辭をこらして描くことが義家の行動を際立たせることになっている。それに現地での戦闘を記録する形式をとりなが

ら、その物語の立つところ、視点は、中央、京都にある。

(9) 佐伯経範、將軍の行方を求めて賊陣に入り討死する。

〈是の時〉は、例によって話を並列的に重ねる常套表現である。官軍の一員佐伯経範が日頃、將軍の恩寵を篤くしていたことを注しつつ、それゆえに將軍の行方を案じる。この経範の行動は、(軍敗る、の時)とあるから、前段の黄海での合戦の一面面をなすものである。全体として黄海の合戦に総括される、一方面での戦況を並行して描くもので、この描きようが冒頭の接続語(是の時)を立てさせたのである。

この経範の行動を配下の散卒、随兵らとの討死の中に描く。直接話法を使用するものの、例えば、(將軍、賊の為に困まる。随兵数騎に過ぎず。之を推すに脱れがたからん)に見るように、全く漢文体の域を出ない。その文体が、語り手の立場を示している。公式記録者としての立場である。

(10) 藤原景季、生け捕られ斬られる。

前段同様、黄海合戦の一こまを並列的に語るものである。まず將軍配下の忠臣、景季の略系図と性格を寸言する。この形式は中国の史書の形式を踏襲するものである。その性格ゆえに戦闘のさまを漢文体で記し、馬がつまりたゆえに心ならずも生け捕られ、賊徒はその武勇を惜しみながら斬ったという。一貫して將軍の軍の敗戦を描きながら、関心はその官軍に属する武将の奮闘を顕彰することにある。

(11) これも前段にひき続き、黄海の戦いの一こまを並列的に記す。
 〈皆万死に入りて一生を顧みず〉の文に見るように、家臣らの將軍
 頼義への忠節を外部視点で記す。このため頼義軍への称賛を記しな
 がら物語は客観的で、記録体を出さない。

(12) 腹心の藤原茂頼、將軍が討死したものと思い、剃髪してその遺
 骸を求めぬ。

〈又〉の接続語を以て前段に並列的につなぐ。〈数日將軍の往く
 所を知らず〉とあるから、合戦の当日から数日を経過しているはず
 である。物語としては、その日次の経過を考慮して配列すべきだが、
 結局、茂頼の忠節談を並列的に語るに留まる。ただ、主が討ち死し
 たと早とちりした茂頼の思いを直接話法で記し、主に再会して〈且
 つ悦び且つ悲しみ〉の疊語表現に、現場の模倣再構成を見せるが、
 それも〈忠節猶感ずるに足りれ〉として語り手の評語を直設に表記
 し、主役將軍への忠節を語ることに収斂してゆく。かくして物語の
 主題、主役は顕著に見られる。

(13) 平国妙、捕らわれ武士の恥となる。

〈又〉の接続語によって前段につなぐ。官軍の一配下、国妙の人
 となり、勇猛なる性格を記して〈未だ曾て敗北しないことから〈俗
 号に平不負〉という異名を付けられたとする。国妙評に世の評を加
 えてはいるけれども、將軍の先鋒として武勇を發揮しながら馬が倒
 れたため生け捕りにされたこと、たまたま賊將が外甥であったため
 助命されるが、〈武士猶以て恥と為す〉との語り手の評語を加える。

將軍の立場から見ての評語である。〈不負〉という異名を呈される
 ほどの勇將ながら、馬の負傷から心ならずも生け捕りになった国妙
 の身に即するならば、当然、物語言説があつてしかるべきだが、編
 者の評語に見るような討手を軸とする主題のゆえに言説化しない。
 以上で、第二章段、列挙し来たつた黄海での戦いの將軍配下の個々
 の合戦記録は終わる。

四、將軍頼義の苦戦と対策

(14) 將軍頼義、兵糧、兵士の不足を訴えるが新任の出羽守齊頼も動
 かず、ために貞任らの横暴を制止できず。

〈同年十二月の国解に曰く〉の冒頭は、前段、黄海の戦いの〈同
 年十一月〉から時の経過、ひいては場面の転換を示して、章段
 を新たにすることを示している。將軍の苦難の訴えを国解の文のそ
 のままの掲出によって示す。その訴えに中央では出羽守兼長を更迭
 するが、替わつた源齊頼も〈全く征伐の心無〉いために、貞任らの
 横行・略奪がつゆる。その貞任の横暴を〈白符を用ふべし、赤符を
 用ふべからず〉と、將軍の命を意に介さない様子を語る。相次ぐ、
 官軍にとって不利な状況の積み重ねが、將軍を一層苦難へと追い込
 んでゆく。外部視点による客観的な記録文の積み重ねが、主役將軍
 頼義の苦難をひき続き語る。

(15) 高階経重、陸奥守として着任するも帰洛。將軍頼義、俘囚の清
 原光頼・武則らに援を求めぬ。

〈而して〉と、並列的接続語により前段につなぐ。ただし〈康平五年(一〇六二)の春〉とあるように、前段の天喜五年(一〇五七)から五年が経過して、その間は省略法にしたがっている。將軍を主役とする討伐行としては、この間、状況の変化が無かったとの判断が、この省略を行わしめたのである。ただ、この五年目に頼義の陸奥守の任が終わったため、高階経重が新任の国守として着任しながら、国内の人民が前司である將軍頼義になつくゆえに、帰洛、朝廷では議論が紛糾するが、この間にも頼義の俘囚懐柔策が続いて、ようやく同年の〈秋七月〉に清原武則が將軍に従ったとする。朝廷のにえきらぬ対応に比べて、五年間の省略がかえって頼義の粘り強い対応を描くことになり、ようやくそれが報われるに至ったと言うのである。

以上、(14)(15)の二段は、第三章段として黄海合戦後、五年の経過の中に、たゆまぬ頼義の努力が実りを見せ始める、追討行の前半と後半をつなぐ機能をはたしている。

五、將軍、攻勢に出る。

以下、第四章段、將軍の追討行は動き始める。物語の本題をなす部分の開始である。

(16) 將軍頼義、軍容を整え出陣。

〈將軍大に喜び〉は、前段、武則らの参加を受ける。〈七月二十六日を以て国を発す、八月九日、栗原の郡當岡に到る〉は、これま

でと違って、日付の記録が詳細になる。それは上述の通り、征伐行の本番の開始を物語るためである。割注による田村麻呂將軍の蝦夷征伐の回想は、この出陣に対する編者の期待を示すものに外ならない。事実、將軍と武則真人の遭遇を喜ぶ様を描き、前段を受け、馳せ参った清原武貞らを第一陣とし、以下その布陣を列挙するのは、いくさ物語として勢揃えをなすもので、これもクライマックスへの序曲をなす。しかも武則の皇城遙拝、將軍への忠誠の決意を直接話法で再現し、その一行の決意に呼応して〈今日鳩有り、軍上を翔る。將軍以下悉く之を拜す〉は、この序曲を受けて、後の勝利を予告するものである。出陣・布陣、武則の決意表明、神の子兆の順序が、この後の展開を予告する。將軍の征伐記を記録するものでありながら、構成法がその主題を明示している。

(17) 將軍、小松の柵を攻め破る。

〈則ち〉(尊経閣文庫本は欠く)は、前段の神の子兆を受け、早速、松山街道へ出陣したことを語る。翌日、萩の馬場へ到着したこと、目標の小松へ五町あまりであることを言い、日次が悪く、夜に及ぶことから一旦、攻撃の手を緩めるが、配下の武貞が敵状の視察に出掛けて、敵の〈柵外の宿慮〉を焼いたことから、思わず開戦、將軍は、宋の武帝の故事を引いて兵機に従うべきことを言い、日がらや時刻を無視して一気に攻撃に移る。語り手の視点は、將軍の側にあり、ために〈城中擾乱、賊衆潰え敗る。しかも城内の宗任らが討つて出るに及び〉〈前陣頗る疲れ〉る。これは官軍の先鋒を指すから、

一貫して視点は官軍にある。七陣の陣頭武道の要害へも「宗任が精兵……襲ひ来る」(「武道迎へ戦ふ」)「賊衆……逃げ走る」も、視点は一貫している。「万死に入りて一生を忘れ」は、第十一段の和氣一門の戦いにも見られた、この語り手の常套文句であるが、官軍への同化の姿勢を示す。「射斃す所の賊徒六十余人……官軍死する者十三人、疵を被る者百五十人なり」の記録は、一つの合戦の終結を示す。かくて小松の柵の合戦は、合戦記として完結している。第四章段の終結と見るべきであろう。

六、官軍の快進撃

以下、貞任の反撃に移るが、

(18) 官軍、長雨のために兵糧に苦しむ

は、第五章段の冒頭にあつて、次の合戦へのつなぎもなす。焦点は、兵糧の調達にとどめる官軍にある。ここで十八日間の経過を見てい

る。

(19) 貞任の反撃を、武則、將軍とはかり迎え討とうとする。

「貞任等此の由を風聞して」は、前段の官軍の難渋を受ける。貞任の決意を直接話法で記すが、しかもその語りは、

則ち九月五日を以て、精兵八千余人を率ゐて地を動かし襲ひ来る

と、主語が転換して、結局、官軍に視点が移っている。語り手は、全知視点をとりえない。事件の外部にいる語り手ながら、視点は事

件の内部に入っている。武則と將軍との直接話法を積み重ね、武則のはやる思いを、一旦將軍は「子、謀を失へり」と制しながら、官軍に兵糧のとほしい現在、長引いては不利、幸い味方に「一旦鋒を争ひ、雌雄を決せんと欲す」る戦意がある。それに、この味方の餌食になるかのように賊軍もやって来る。味方の戦意のある間に相手を叩くべきだと言つたため、將軍も全面的に武則の意見をいれ、勾踐の故事を引用して決戦を促す。武則もこの將軍の言に鼓舞され、「賊に向つて死すと雖も、敵に背きて生くることを得ざらん」と決死の覚悟を固める。この將軍頼義と侍大将武則の直接話法の積み重ねによる応答が、両人の決意を語っている。語り手は、官軍の動きに半ば同化している。

(20) 官軍、奮戦して貞任軍を破る。

「是に於て」は前にも見た通り、段をつなぐ接続語である。將軍の軍を「常山の蛇勢の如し」「虎のごとく視、鷹のごとく揚り」の直喩を以て描く。以下、貞任軍の敗北から、

官軍勝に乗つて北ぐるを追ふ

襲ひ撃つて之を殺す

射殺す所の賊衆百余人……

は、やはり一貫して焦点が官軍にある。官軍の側に視点を置いて貞任軍の追討語りをなしている。さらに將軍は、敵の息を休めるべきでなく、今夜の中に敵を殲滅すべきだと直接話法の形で指示する。しかも

(21) 將軍、味方の負傷者を見舞う。

その將軍の行動を「且つ士卒を饗し、且つ兵甲を整へ」と単起的言説を積み重ねて描くのは、頼義の將軍としての実行力を語るものである。この將軍の行動に、戦士たちも感激して唐の太宗の故事を引いて、この將軍のために命を惜しまず戦おうとするその決意を、やはり直接話法で語る。

(22) 武則、敵の城内に兵を潜入させ、城外と呼応して奇襲し、貞任を破る。

「而して」(尊経閣文庫に欠く)の接続語により、前段の場面に並列的に重ねる。「敢死の者」五十人を敵の城内に潜入させるといふ「敢死」(「俄に火を挙げしむ」)の表現は、語りの焦点が官軍、武則の側にあり、これに対する貞任軍を「不意に出でて」「擾乱す」「駭き騒ぎ」という受身の表現で語る。両軍の合戦を語り手の位置は物語場面の外にありながら、語り手の思いは官軍の側に傾いている。

(23) 官軍三手に分かれて衣川を攻め、武則、久清を敵に潜入させ放火させて貞任らを敗走させる。

「同六日」の書き出しは、第十九段に続く、翌日への日替わりを示す。「即日」將軍は衣川の攻略を決意、この間、「件の関は、素より隘路峻岨……」などと、峻難であること、重ねて天候の不順なることを記述するのは、それを敢て急襲せんとする將軍の決意の強さを示すものである。「然して」として、味方を三方に分ち戦闘を描くのも、焦点が官軍にあることを示すし、中でも武則の、兵士久

清に潜入を命じる、それも直接話法で語るのは、さらに語り手の武則への思い入れを示すし、この久清の行動を「則ち猿猴の跳梁するが如くに」と直喩を以て語るのも、その思い入れの一環をなす。これに応戦する貞任の軍の早速敗走を記すのも、前半の官軍の、語り手の思い入れ豊かな語りと対照をなす。官軍と賊軍との対比が顕著な言説である。賊軍の生捕が貞任軍の名將の討死を直接話法で洩らし語るのは、それまでの官軍の進撃を語り続けて来た、その勢いの余りに抗しようの無かったことを「賊帥死する者数十人」と記録することとどめて、結果的に武則ら官軍の進撃を一層機動的なものに語るようになっていく。

(24) 將軍、鳥海に入り、武則の積年の忠節を褒める。武則、これを拝受しただちに三柵を攻略する。

「同じき十一日」とあるから、前段から五日を経過している。この間を省略し、戦わずして鳥海の柵を攻略したことを語る。日付の記録を残しながら、將軍の歴戦を積み重ねることに語り手が官軍に焦点を当てていることを顕著に示している。柵中に敵の残しおいた数十桶の酒を見て、將軍は一旦、毒酒かと疑う配慮を忘れない。雑人が毒見をして酒宴となり「万歳」を叫ぶが、ここで勝利を喜ぶ將軍が、武則の積年の功績をほめたたえ、これに答えて、ひたすら將軍の指示のままに十余年にわたり苦勞を積んで来たことを喜び、さらに突如、將軍の白髪が苦勞の解消により半ば黒く元にもどるのを見て、この後、厨川を破り貞任を討つに及んで、完全に元の黒色

にもどり体重もふえるだろうと祝意を表す。その祝いのことばをも將軍はひとえに武則の功績によるものと返す。都合二度にわたる両人の対話がいずれも直接話法により語られる。そのあげくに、黒沢尻・鶴脛・比与鳥の三柵を攻略したことを要約法に従って記す。これは貞任を最後に追い込むものである。

以上が第五章段、官軍の快進撃である。

七、つめの合戦

以下、最後の決戦、厨川の戦いにのぞむ。

(25) 將軍、厨川を攻め、八幡の神助をえてこれを焼き討つ。この間、三日を省略して「同じき十四日」の発向、翌日の厨川到着、以後その経過を複数の小段により語る。すなわち、第一小段において官軍の布陣を略述し、第二小段では、対する賊軍の城柵の構えとその応戦の準備を記す。第三小段では、雑女数十人を使つての、城内の官軍挑発と、これを攻める官軍の数百人の犠牲を記す。ここで第四小段、將軍の指示により民家を破壊し、その木材と萱草を川岸に積み、これに將軍が皇城を選擇して、漢の武將軍の故事を想起し八幡に祈願する。八幡神の使者鳩が翔ける奇瑞を契機に討手は火を放ち、城を焼き払う。ここでまた武則の策として囲みを解き、逃げ出す賊徒を討ちとる。都合、五小段から成る厨川の合戦を、前半は城内の賊軍に有利であったのが、後半、將軍の祈願により八幡の加護をえて逆転する経過を語り、記録の域を越えて一つの合戦物語を構成して

いる。語り手の官軍への加担の姿勢が濃く、追討記としての構想を露骨に呈しながら、『平家物語』『太平記』に完成される合戦談の型を早くも見せている。

(26) 將軍、巨利経清を生け捕り、旧悪を責め、斬首。

「是に於て」の接続語により前段を受ける。以下、経清を生け捕つた將軍の訊問を直接話法で記す。その「今日白符を用ふることを得るや」の詰問は、第十四段、天喜五年(一一〇五七)、將軍が新たに任命して兵糧、兵士の徵発をはからせた源齊頼が動かず、ために貞任らがますます諸郡に横行して人民を却略、特に衣川にいた経清は官物を横領、そのみかへ白符を用ふべし、赤符を用ふべからず」として將軍をながしがしろにしたことを受けている。前に「將軍之を制すること能は」なかつた。その將軍の憤怒がここに「將軍深く之を悪む」として、「鈍刀を以て漸に其の首を斬」ることになるのである。その処刑の方法は、後世、説経浄瑠璃など、在地色の濃い語り物に見られるものであるが、「漸に」(徐々に)や、「是れ経清が痛苦の久しからんことを欲すればなり」は、この場の主人公、將軍の思いを語るものである。この討伐行の外側にある語り手ながら、一步、登場人物の思いに立ち入る、内在的視点の叙法をも見せしている。

(27) 官軍、貞任を刺し將軍の面前に置く。貞任、間もなく絶息。

「貞任は、劍を抜きて官軍を斬」るは、前段への積み重ねで、内容的な繋がりに欠ける。この貞任の行動に続けて、ただちに「官軍鋒を以て之を刺す」も、また積み重ねで、この間、語り手の貞任へ

の思い入れは全く見られない。ただ「其の長六尺有余、腰の囲七尺四寸、容貌魁偉」(皮膚は肥白なり)は、その外容を記すのみである。將軍の問責に対し「貞任一面して死す」は、返す言葉もない、あつけない貞任の最期である。

(28) 安倍一族の結末。

「又弟重任を斬る」は、積み重ねである。以下、宗任の逃亡を積み重ねる。ここで、貞任の子息、十三歳の千世童子の「容貌美麗なり、甲を被柵の外に出て能く戦ふ」も積み重ねであるが、その奮戦を描くのは、そのけなげさのゆえに將軍が「哀憐して」(宥さんと欲す)という、十三歳の若さで「驍勇」なるがゆえに敵をも哀れむ將軍の手柄を賞揚するものである。結局、武則が制止するので將軍も納得してこれ斬る。城内の婦女については、則任の妻が亡夫に殉じて深淵に身投げするが、これを語り手は、女の貞操と決意を「烈女と謂ひつべし」と感じる。それゆえにその女の決意を「君將に歿せんとす。妾独り生くることを得ず。請ふ、君の前に先づ死なん」と直接話法で記している。敵將貞任の死を記した後、羅列的に一門の結末を記すものである。かくて末尾に「又数日を経て、宗任等九人帰服す」とするのは、一旦逃亡した宗任の結末を記して、第二十五段以下、貞任の乱の最後の決戦の決着を見るに至ったことを語る。第六章段の結びである。

八、完結

(29) 国解に將軍頼義の戦勝を報す。

「同十二月十七日……」の日録は、第七章段を語り起こす。そして將軍の戦勝を国解の中の「斬獲の賊徒」揃えを抄出することによって語る。この場合、国解そのものの実態は不明だが、国解を再構成することで、第七章段を起こしながら、前段の結末の後に、戦勝を要約したものである。ただ一人、討ち洩らされていた正任も、一旦出羽頼遠のもとに隠れていたのが、宗任の帰服を知って「又出で来り了んぬ」と結ぶ。

(30) 義家、戦闘中、強弓を發揮、後日、武則その技を確認。

義家の弓勢を語る部分である。「合戦の際」とするのは、上述し来たった追討合戦当時を回想する、いわゆる後説法によるものである。その戦闘の弓勢を「甲士を射るごとく」、皆弦に應じて死す」と略述する。話はむしろこの回想を受けて「後日」とし、以下、武則が堅甲三領を木の枝に懸けて、これを試射させ、「甲を貫くこと三領」という義家の技に驚嘆する武則のこぼしを、直接話法で語るところに、語りの意図するところがある。この義家の賞揚は、第八段、黄海の戦いで「將軍の長男義家、驍勇絶倫にして、騎射神の如し」と記したことを受けるものである。いくさ物語としては、当然、その義家の戦闘を物語として構成すべきところであるが、その契機を得なかつたためか、第八段以後に物語る所が無い。一方で義家の「驍

勇」を賞揚しようとする編者の思いが、この後日の試射を語ったのであろう。〈後日〉は、この場合、貞任の乱終了後を指すものと見てよいだろう。

(31) 貞任らの首入洛に、担夫、亡主の髪を梳り、人々の涙をさそう。前掲、国解の戦勝報告から数か月経過した(同六年二月十六日)

に、貞任らの首が都に入る。これを見ようとすると群集を(車は轂を撃ち、人は肩を摩す)と注す。誇張表現である。物語としては、〈是より先〉として、首の都入りに先立ち、近江甲香で貞任の首を洗い、もと貞任に仕えていた担夫が、やむなく自分の垢のついた櫛で亡主の首を梳る場面にある。〈豈囃らんや、吾が垢の櫛を以て忝くも其の髪を梳らんとは〉と嘆息する様子を直接話法で記し、それを上述の通り〈是より先〉として時間の順序を廻り、しかも(衆人皆涙を落す)と、衆目を前提とする場を構成することで語っている。

これを従来、『陸奥話記』の成り立ちに素材としてあったのを拾った(衆口の話)によるとしたのであるが、これを一編の物語として見れば、素材を拾ったことはあったとしても、見たような後説法を以て、しかも衆目を前提とする説話の手法を借りながら、担夫に同化する語りの方を以て構成したもので、あくまでも『陸奥話記』そのものの世界である。物語の敵役を演じた貞任の死を、語り手が担夫の思いに同化することで語ったものである。

(32) 頼義らに論功行賞。本書執筆の由来。

戦乱追討記のしめくくりをなす部分である、追討に功績のあった

將軍頼義以下、義家・武則らの行賞を列挙し、これらを(勲賞の新なること、天下の榮となす)と天下の眼を前提に顕彰する。しかもこれをまず漢の高祖の故事、本朝では坂面伝母礼麻呂、猛将(文室綿麻呂かと言う)の先例を引きつつ、それらを越える頼義の功績を賞揚するのである。

以上、頼義の称賛を以て結びとするのは、この物語の冒頭、第二段で、その登場を描いて(性沈毅にして武略多し。最も将帥の器たり)としたのと呼応する。すなわち、頼義の称賛を外枠とする貞任追討の記としての構成を完成するものである。

続く(今国解の文を抄し、衆口の話拾ひて、之を一巻に注す。少生但し千里の都外たるを以て、定めて多くの之を糺繆せん、実を知る者之を直さんのみ)とするのは、本書の成立を記す謙讓のことで結ぶ、著者自身の奥書をなすものである。いくさ物語の表現としては、編者が、事件の外部にある、つまり作中人物としては筋に不在の語り手であり、外部から内容を語りながら、時に物語の登場人物に入り込むこともある。貞任側の行動に視点をすえたり、直接話法を以て接近することもあるが、それは結局、討手の頼義を顕彰することになる。かくて、従来からも言われて来たように、その成り立ちが国解に立脚するところから、追討記としての枠組みを崩すことがない。そのためにどうしても公的な姿勢を前に押し出すことになった。この事が主役の頼義を叙事詩の英雄たらしめない。その公的な秩序が、文体としては、『将門記』とは対照的に純正漢文体

を保障したし、そのことが物語としての再構成に現実感を欠かせることになった。ただ、この後、中世に出現するいくさ物後の叙法の数々はすでに出尽くしていると云えるだろう。

九、章段構成と人物配置

以上、物語を七章段に分ち、読んで来た。すなわち、

第一章段は、乱の前哨戦であり、動乱のきっかけをなした安倍頼良を登場させ、これを討伐する頼義を対立させる。この物語の場合、『平家物語』が、討たれる清盛ら平家一門に焦点を当てるのとは違って、追討者の頼義を主役とし、頼良（頼時と改名）を相手役とする。そしてその長男の貞任が、その素性はわからないが、藤原説貞の娘との婚姻をめぐる遺恨から新しい火種を作るに及んで、物語は將軍頼義と貞任との対決に切り替わる。この間、頼義の任期が切れるが、新任の国司が尻込みするので、頼義が重任、引き続き事に当たると。このように新任の国司と対比することで、頼義の存在を一層重くし、この將軍と反乱軍との両方に直接話法や視点の接近、直喩などのレトリック、漢籍からの引用・例証などを使って語り手の、武士主従の生き方や倫理への立ち入りを示しながら、両者の対決の中に主役頼義の存在を大きくするのが、この物語の方法である。作品の構想としては、このような人物の配置が、この物語を一層公的な追討記としての色彩を濃くした。

第二・三章段は、頼義の決意にもかかわらず將軍の側の苦戦を見

いくさ物語表現史(二)(山下)

る。兵員・兵糧の増援を求めるが、一向に目を向けてくれない中央に対し、苦しむ頼義は、たゆまぬ努力を重ねて俘囚の武則らを懐柔する。以下、その武則が將軍を補佐する役割を演じる。苦戦の中に、將軍の長男、義家の奮闘を語ることをも忘れない。合戦の並べ方は、並列的で漢文体の固さは溶けなくても、視点は將軍の側にある。第四章段は、前章の武則の合流を契機として、將軍の反撃から第五章段、官軍の快進撃、第六章段は、つめの合戦である厨川の合戦へと進め、貞任の死を描く。その間、それまでとは調子を異にし、日次を詳細に記し、神の加護をも加えて、後日を見通す形で、いくさ物語としての形態を整える。視点は全く將軍の側にあり、すぐれた將軍の実行力と決断、配慮を武則の將軍補佐のもとに描く。このような構想から、貞任の方は受け身である。

第七章段は、戦後の処理であるが、第二章段に見せた義家の武勇を回想的に顕彰し、衆人の耳目を借りて、賊將貞任への憐れみをも語り加える。それは、いくさ物語の常として、滅んだ者への鎮魂の語りであるとともに、物語の主役頼義に対して相手役を演じた貞任への語り手の思いでもあった。物語の人物配置がしからしめたものである。

注

- (1) 清水 徹「政治と情事」『大岡昇平の世界』一九八九年九月
- (2) 『陸奥話記校本とその研究』一九六六年三月。
- (3) 山下「軍記物語と語り」『日本文学講座』4 一九八七年五月。

- (4) ジェラルド・ジュネット『物語のディスコース』花輪 光・和泉涼一訳、一九八五年九月の「叙法、言葉についての物語言説」。
- (5) 安岡章太郎『天誅組』について『大岡昇平の世界』一九八九年九月。
- (6) 注3の論。
- (7) 小松茂人『陸奥話記』の虚構―『中世軍記物の研究』(続)一九七一年一月。